見本

Philosophy of Sport and Physical Education

髙橋 徹 編著

はじめて学ぶ 体育・スポーツ哲学

みらい

見本

はじめに

この本を手に取った読者のみなさんにとって、体育やスポーツはとても身近な存在だと思います。みなさんが小学校に入学して以来、中学校、高等学校と進学するなかでも、時間割表のどこかには必ず「体育」、もしくは「保健・体育」という言葉が載っていたはずです。また、スポーツについて考えてみても、毎朝毎晩のテレビのニュース番組を見れば、必ずといってよいほどスポーツコーナーがありますし、チャンネルを回せばいつでも簡単に野球やサッカー、テニスやゴルフなどのトップ選手のプレーを目にすることができます。あるいは、日頃から部活動やサークル活動などを通して、自分自身で身体を動かしながらスポーツに親しんでいる方も沢山いることでしょう。本書は、そのようなみなさんにとって馴染み深い体育やスポーツについて、「みる」ことや「する」ことだけではなく、体育やスポーツを「知る」こと、「学ぶ」こと、「考える」ことのひとつのきっかけを作りたいという思いで書かれています。

さて、本書のタイトルは『はじめて学ぶ体育･スポーツ哲学』です。「はじめて」という言葉からもわかるように、本書は体育やスポーツを新たに学んでみたいという方に向けた入門書としての内容になっています。ただし、「体育･スポーツ哲学」という言葉は、多くのみなさんにとって聞き慣れない言葉かもしれません。ここでは、本書で学ぼうとしている「体育・スポーツ哲学」について簡単に紹介しておきましょう。

「体育・スポーツ哲学」は、体育やスポーツを「哲学」という立場から論じる研究領域です。それは言うなれば、「体育とは何か？　スポーツとは何か？」という本質的な課題を問い続けながら、体育やスポーツの理想の姿を明らかにしようとする分野であるということができます。したがって、本書のなかでも、執筆者の一人ひとりがそれぞれの立場から「体育とは何か？　スポーツとは何か？」を考え、そこから導き出された体育やスポーツの姿をわかりやすく解説してくれています。

本書を執筆したメンバーは、「日本体育・スポーツ哲学会」に所属する研究者が立ち上げた研究会、「体育・スポーツ原理研究会」で活動をともにする研究者たちです。日頃から学会大会や研究会はもちろんのこと、時にはプライベートの時間にも議論を交わしながら、「よりよい体育とは何か？　よりよいスポーツとは何か？」をともに考えてきたことが本書の執筆につながっています。しかし、同じ領域を専攻していても、それぞれの執筆者ごとに興味や関心が異なるため、体育やスポーツを考えるうえでのアプローチの仕方も少しずつ異なっています。したがって、本書の各章のタイトルにもなっている「身体教育」「運動指導」「体育･スポーツ指導者」

見本

「オリンピック」「スポーツのルール」などの各トピックスは、それぞれの執筆者が関心を持って研究に取り組んでいる内容ということになります。

なお、本書は体育やスポーツを学ぶうえでの入門書ではありますが、体育やスポーツを専攻する学部・学科や、教員養成課程のある学部・学科で開講されている「体育原理（別名：体育哲学、スポーツ原理、スポーツ哲学、体育・スポーツ原論など）」の授業で使用するテキストを意識した内容になっています。ですが、もちろんそれ以外の目的で読んでいただいても十分に楽しめる内容です。

本書は、第１部の基礎理論と第２部の応用理論とをあわせ、全12章から構成されています。第１章～第６章までの第１部は、体育とスポーツを学ぶうえでぜひとも知っておいて欲しい基礎・基本を取り扱った内容になっています。第７章～第12章までの第２部は、より発展的な内容として、具体的なスポーツの事例を数多く取り上げながら議論を進めています。また、第１部、第２部とも各章のはじめに「Key-point（キーポイント）」、章末には「Column（コラム）」を載せていますので、そちらも本文を読み進めるうえでの手掛かりとして、ぜひ目を通していただきたいと思います。なお、各章の内容は少しずつ関連していますが、基本的にはそれぞれが独立した内容になっているので、どこから読み始めていただいても構いません。

読者のみなさんが思い思いにこの本を読み進めるなかで、体育とスポーツについての学びを深め、体育とスポーツの理想の姿を考えるきっかけを見つけ出してほしいと思います。

最後になりますが、編著者からの企画提案を快く受け入れ、お忙しいスケジュールの合間を縫って筆を進めていただいた執筆者の先生方には、心より感謝申し上げる次第です。また、本書の出版を打診していただいた株式会社みらい企画課の稲葉高士様、企画段階から出版までを丁寧に導いて下さった同社企画編集課の吉村寿夫様には大変お世話になりました。執筆者を代表して改めてお礼を申し上げます。

2018年１月

編著者　髙橋　徹

見本

もくじ

はじめに

第１部　体育とスポーツを学ぶうえでの基礎理論

第１章　体育とスポーツ

1　スポーツとは何か …… 12
1　スポーツという言葉の語源　12
2　スポーツの定義と特徴　13
3　スポーツとは何か　15

2　体育とは何か …… 16
1　体育という言葉の語源　16
2　体育の定義　17
3　体育の構成要素　18

3　教科としての体育の成り立ち …… 20
1　教科名称の変遷　20
2　学習指導要領の変遷　21
3　体育理念の変遷　22

Column　スポーツに夢中なる理由を考えてみよう　25

第２章　身体教育という考え方

1　身体教育の身体とは …… 26
1　身体を理解する　26
2　「身体」のとらえ方　28

2　身体教育に必要な視点 …… 29
1　「身体を育てる」/「身体が育つ」　29
2　身体教育の実践　31

3　身体教育の現在〈いま〉 …… 33
1　教材としてのスポーツ　33
2　身体教育としてのスポーツの可能性　34
3　〈できる〉に出会う体育を目指して　35

Column　「できない」を楽しむ力　37

見本

第3章　「運動を指導する」ための考え方

1　運動実践とは何か …… 38

1　スポーツと運動の差異と区別の難しさ　39
2　人間が運動を実践するということ　40
3　人間の運動実践の独自性　41

2　運動実践と運動習得 …… 42

1　運動習得における「翻訳」　42
2　運動習得と「実践の中の知」　43
3　運動実践と「身体の相互作用」　44

3　運動実践と運動指導 …… 45

1　運動指導における身体の見方　45
2　指導者と実践者の共通基盤となる「実践の中の知」　46
3　情報伝達を基にした運動指導からの変換　47

Column　運動実践のための「事象そのものへ」　50

第4章　身体文化教育という考え方

1　身体に根づく文化 …… 51

1　身体文化と身体技法　51
2　身体文化と教育　52

2　芸道にみる身体の学習論 …… 54

1　身体への文化伝承　54
2　身体の模倣と学び　56

3　教養としての身体文化 …… 57

1　「教養」への着目　57
2　教養としての身体　59

Column　身体を育み、心の花を咲かせよう　62

第5章　体育・スポーツ指導者

1　体育教師とは何をする人？ …… 63

1　体育教師像の今と昔　63
2　体育教師はスポーツを教えることが仕事なのか　65
3　体育教師の専門性を考える　66

2　運動部活動の指導者論 …… 68

1　教育とスポーツのあいだ　68
2　なぜ勝ちたいのか？　69

見本

3　指導者に求められるインテグリティ　70

3　体育・スポーツ指導者の身体を育てる …… 72

1　なぜ、身体なのか　72

2　身体としての体育・スポーツ指導者　73

Column　普通の毎日こそが面白い!?　76

第6章　スポーツ指導の問題性

1　体罰・暴力問題を考える …… 77

1　考え方の作法　77

2　「言語分析」という方法　78

3　体罰・暴力のメカニズム　80

2　体罰・暴力問題の解決に向けて …… 82

1　体罰・暴力問題の解決にはスポーツ科学を？　82

2　スポーツ指導の本質を考える　83

3　スポーツ指導のあり方を考える …… 87

1　現象学的運動学の可能性　87

2　体罰・暴力問題から考えられるスポーツ指導のあり方　89

Column　悲観でもなく楽観でもなく、日々、新たな実践へ向かって　91

第2部　体育とスポーツを深く知るための応用理論

第7章　競技者の世界と理想の姿

1　競技者という存在について …… 94

1　競技者とスポーツ愛好者　94

2　競技者が直面する困難　96

2　競技者を競技生活に惹きつけるもの …… 98

1　競技者が獲得する卓越について　98

2　「競技者としての卓越（善さ）」と「徳（virtue）」　99

3　競技者にみる理想の姿 …… 100

1　アリストテレスの徳論と競技者論　100

2　三浦知良選手にみる「有徳な競技者」論　103

Column　アリストテレスの「友愛」論　106

見本

第8章　オリンピックと世界平和

1　オリンピックにおける平和思想と平和運動 …… 107

1　「オリンピズム」とは何か　107
2　古代オリンピックから生まれた平和思想　109
3　クーベルタンの平和思想　110
4　「オリンピック休戦」とその実相　111

2　「平和」を揺るがす近代オリンピックの弊害 …… 112

1　戦争による弊害　112
2　国威発揚として利用されたオリンピック　114
3　テロ対策に追われる戦後のオリンピック　115

3　世界平和に貢献するオリンピックの役割とは …… 115

1　近代オリンピックにおける「平和」思想遂行の限界　115
2　友好を促進する大会に向けて　116

Column　オリンピックをアフリカ大陸で　118

第9章　スポーツのルールを考える

1　面白さをデザインするルール …… 119

1　スポーツにおけるルールの本質的機能：面白さの保障　119
2　ルールのシステム：スポーツのなかにある意味のつながり　120
3　ルールに向き合うスタンス　122

2　プレーするためのルール …… 124

1　競技の本質と安全　124
2　野球におけるコリジョンルール　125
3　スポーツの文脈における危険と過剰な危険　126

3　ルールとペナルティ …… 126

1　正当な利益の回復・補償と不当な不利益の予防　126
2　なぜルールを守らなければいけないのか　127

4　参加条件を定めるルール …… 128

1　性別二元制にかかわるルール：性別確認検査　128
2　トランスジェンダーの参加資格　129

Column　ルールが沈黙しているとき　131

見本

第10章　スポーツにおける美しさを考える

1　スポーツと美しさ …… 132

1　美しさの観点からみたスポーツ　132
2　美しさとは何か？　133
3　スポーツを見たときに感じる美しさの区分　135

2　スポーツと芸術 …… 136

1　芸術性を競い合うスポーツ　137
2　芸術とは何か？　137
3　スポーツと芸術の関係　139
4　スポーツ・美・芸術の考え方　141

Column　スポーツを見るということ　144

第11章　コミュニティとスポーツをめぐる諸問題

1　コミュニティとスポーツ …… 145

1　コミュニティとは何か　145
2　現代社会におけるスポーツの考え方　147
3　コミュニティづくりにおけるスポーツの位置づけ　148

2　コミュニティとスポーツの現状と課題 …… 150

1　子どものスポーツ環境をめぐって　150
2　大人のスポーツ環境をめぐって　151
3　スポーツ環境の整備方策などが抱える問題点　152

3　コミュニティづくりにおけるスポーツの可能性 …… 153

1　なぜコミュニティが必要なのか　153
2　生涯学習とスポーツ　155
3　コミュニティの活性化をもたらすスポーツ　155

Column　活動のコミュニティ　157

第12章　スポーツと人間との良好な関係を考える

1　スポーツがもつ功罪 …… 158

1　スポーツと人間との関係　158
2　スポーツにおける諸問題　159
3　スポーツの諸問題における「人間らしさ」の否定　161

2　スポーツとの良好な関係が崩れてしまう要因 …… 162

1　自己を見失うようなスポーツとの付き合い方　162
2　人間によるスポーツの操作　164

見本

3　スポーツとの良好な関係づくりに向けて …… *166*

1　自らの意志によるスポーツへのかかわり　*166*

2　選手と指導者の関係性　*167*

3　スポーツに対するニュートラルな態度　*168*

Column　スポーツで自己を実現するということ　*170*

索引　*171*

見本

第1章　体育とスポーツ

key point

第1章は、本書を読み進めるうえでのキーワードである「体育」と「スポーツ」という2つの言葉に焦点を当てた内容になっています。本章の学びのポイントは以下の3点です。

①「体育」と「スポーツ」それぞれの言葉の語源や成り立ちを理解しよう。
②「体育」と「スポーツ」それぞれの定義を知ろう。
③教科としての体育の成り立ちを教科名称や学習指導要領の変遷から理解しよう。

1 ── スポーツとは何か

1．スポーツという言葉の語源

(1)　「スポーツ」と「sport」の語源

「スポーツ」という言葉が日本において一般的に使われるようになったのは大正時代以降といわれている[1)]。明治時代の初め、すでにベースボールやフットボールなどの西洋のスポーツ種目は日本に移入されていたが、それらは当初、「スポーツ」と呼ばれることはなく「遊戯」、あるいは「運動」と呼ばれていた。その後、大正時代にはいると、英語の「sport」を直接的に日本語読みした「スポーツ」「スポート」「スポオツ」などのカタカナ表記が使われ始め、次第に「スポーツ」という言葉が普及していったのである[2)]。

一方で、「スポーツ」とカタカナ表記される「sport」という言葉にもその語源が存在する。一般的に、「sport」の語源は古代ローマ時代のラテン語「deportare」（運ぶ、運び去る）に由来するとされる。その原義である「運ぶ、運び去る」は、「ある状態からほかの状態への転換」をも意味し、ここから「気分転換をする」あるいは「気晴らしをする」という意味に変化を遂げたのである。その後、「deportare」は古代フランス語の「deporter」「desporter」に引き継がれ、古代フランス語から中世英語の「deport」「dessport」へと伝えられた後、「sport」という言葉が使われるようになったのである[3)]。

見本

⑵　スポーツの語源的解釈と近代的解釈

スポーツを語源から解釈するならば、それは仕事などの真面目なことを忘れ、日常を離れて何かに没頭するなかで、気晴らしをすることや遊び戯れることを意味していた[4)]。つまり、冗談を言うことや歌を歌うこと、劇や踊り、チェスやトランプなどで遊ぶことまでもがスポーツとしてとらえられていたのである[5)]。

しかし、今現在、スポーツという言葉を聞いて歌を歌うことやトランプで遊ぶことをイメージするだろうか？　おそらく多くの人にとって、そうした活動はスポーツとは異なる活動としてとらえるのが一般的だろう。すなわち、スポーツという言葉のとらえ方は時代とともに変化してきているのである。

さて、時代とともに言葉のもつその意味が変化するというスポーツの特徴をふまえて、現在のスポーツのとらえ方と語源的な意味でのスポーツのとらえ方は区別して考えることが望ましいとする議論がある。それは、スポーツという言葉の意味をその語源にまで立ち返って考察することと、競争的な身体的活動の側面が強調された現在のスポーツについて考察することとを区別すべきという主張であり、前者はスポーツの語源的解釈、後者はスポーツの近代的解釈と呼ばれている[6)]。つまり、語源的解釈にしたがえば極めて広い範囲でスポーツをとらえることができる一方で、それとは反対に近代的解釈にしたがえば競技種目としてのみとらえることもできるのである。このスポーツの語源的解釈と近代的解釈という考え方は、スポーツの意味を理解するうえでとても重要な観点である。

２．スポーツの定義と特徴

ここでは、スポーツの定義のなかでも代表的な３つの議論を紹介する。

⑴　ジレによるスポーツの定義

フランスのスポーツ研究者であるジレ（B. Gillet）が示したスポーツの定義は、数多く存在する定義のなかでも代表的なもののひとつである。

> 一つの運動をスポーツとして認めるために、われわれは三つの要素、即ち、遊戯、闘争、およびはげしい肉体活動を要求する[7)]。

つまりジレは、スポーツが本来的にもつ気晴らしや遊びなどの「遊戯」の性格とあわせて、「闘争」と「はげしい肉体活動」を追加したのである。なお、

見本

この「闘争」は、対戦相手との闘いだけでなく、時間や距離、自然環境、自分自身との闘いをも意味している。また、スポーツでは「はげしい肉体活動」が求められるために、ほかの遊戯的活動からは区別されるというのがジレの主張である。

⑵　マッキントッシュによるスポーツの語源的解釈

イギリスのスポーツ研究者マッキントッシュ（P. C. McIntosh）は、スポーツが多くの点で人間の生活に影響を与えていることから、それを定義づけることは困難であると釈明したうえで、言葉の語源からスポーツを解釈している。

> フランス語の語源では、人生の悲しいあるいは深刻な面からのどのような気分転換をもスポーツと呼んでいる。それは山に登ることから恋をすることまでの、また自動車競走から悪ふざけをすることまでの活動を一切網羅している。名詞としてのスポーツという語は、男、女、ゲーム、気晴らし、狩猟（chaseおよびhunt）、闘争、冗談、あるいはまた植物の変種すら指している[8)]。

さて、このマッキントッシュの指摘を引き合いに出しながら、ジレのスポーツの定義に対する問題点を指摘する議論もある[9)]。そこでは、ジレが示した３つの要素は19世紀以降のスポーツの特徴であり、それ以前の楽しみや遊びを中心とするスポーツの定義とは異なることが指摘されている。

このような指摘が存在する以上、先に紹介したジレのスポーツの定義は完全な真理とは言い難いが、スポーツとは何かを考えるうえでの重要な指標であることは間違いない。つまり、ジレの定義は、スポーツの語源的解釈と近代的解釈の考え方に当てはめた場合の近代的解釈としての定義なのであり、反対にマッキントッシュの指摘は語源的解釈の立場からのものなのである。このようにスポーツを考える際には、解釈の立場を区別してとらえることが重要になるのである。そして、スポーツという言葉のとらえ方が時代とともに変化を遂げているという状況を鑑（かんが）みるならば、どのようなスポーツの定義であっても、いずれは改訂される可能性を含むものであると認識しておくべきだろう。

⑶　グートマンが示した近代スポーツの特徴

アメリカのスポーツ史研究者であるグートマン（A. Guttmann）もまた、

見本

Column　スポーツに夢中になる理由を考えてみよう

すべてのカモメにとって、重要なのは飛ぶことではなく、食べることだった。だが、この風変わりなカモメ、ジョナサン・リヴィングストンにとって重要なのは、食べることよりも飛ぶことそれ自体だったのだ。

リチャード・バック（1936〜）：アメリカ合衆国生まれの飛行家、作家

この一文は、小説『かもめのジョナサン』の一節です。なぜ、体育とスポーツについての内容が書かれた本書のなかでこの一節を紹介するのかというと、ここに描かれた主人公ジョナサンの様子を通して、スポーツに熱中する私たち人間の姿を考えることができるからです。

主人公のかもめジョナサンは、食事もろくにとらずに空を飛ぶことに夢中になります。そして、時には意識を失いながらも、死をも覚悟しながらも、少しでも速く上手に空を飛ぶための練習に明け暮れるのです。ジョナサンをそれほどまでに空に駆り立てる理由とは何なのでしょうか。「ぼくは自分が空でやれる事はなにか、やれない事はなにかってことを知りたいだけなんだ」とジョナサンは言います。

私たちがスポーツに熱中する理由とは何でしょうか。ジョナサンが言うように、やれること、やれないことを知りたいだけなのかもしれません。人間もまた、かもめと同じように、ただ生きるだけなら速く走ることや物を遠くに投げることは必要ありません。でも、人間は少しでも速く走ろうと、少しでも遠くに物を投げようとしてその記録を伸ばしてきました。自分がやれることの限界を知りたいという欲求、それが人間をスポーツに駆り立てる原点なのかもしれません。

しかし、このお話にはジョナサンが意識を失いながらも、死をも覚悟しながらも練習に明け暮れる様子も描かれています。実はこれと同じように、私たちがスポーツに取り組む際にも夢中になり過ぎるがあまりに、時には自分を傷つけながらも熱中してしまうことがあります。

さて、みなさんはそのようなスポーツとの付き合い方をどのように考えるでしょうか。答えは人それぞれでしょうが、スポーツという言葉の本来の意味が「遊び」であることを考えるならば、自分を傷つけるほどに夢中になることは、スポーツの本来の姿からは少し外れていると考えることもできます。みなさんには、本書を通してスポーツについて学ぶことで、自分にとってのスポーツとのよりよい付き合い方なども見つけ出してほしいと思います。